



あるじでえ

No. 8

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03 (3417) 8492◎ 岡本公園民家園
☎ 03 (3709) 6959

平成元年 8月1日 発行

平成9年 6月 増刷

平成13年 5月 増刷

平成14年 5月 増刷

平成15年 9月 増刷

旧城田家住宅主屋

— 区指定有形民俗文化財第2号 —



写真1 旧城田家住宅主屋・全景（次大夫堀公園民家園内）

- 文化財指定年月日
昭和60年2月19日
- 旧所在地
世田谷区喜多見4-5
- 復元場所
区立次大夫堀公園民家園内
- 復元完了
昭和63年3月竣工
- 規模
桁行 6.5間 (11.8m)
〔下屋1間付〕
梁行 5間 (9.1m)
総高 8.72m
- 延床面積
48坪 (158.6㎡)

旧城田家住宅主屋が所在した世田谷区喜多見四丁目の地は、以前砧村大字喜多見字本村と呼ばれていたところでした。

旧城田家の屋敷地は、その東側ののほり道、北側には筏道と2本の主要な道が交わったところにありました。また、屋敷の斜向かいには、村の古い寺院である知行院があり、この周辺は村内でも賑やかな場所でした。

城田家の家歴についてですが、当家の菩提寺である慶元寺の墓碑及び過去帳にその記述があり、それによると、初代から四代目まで、『平助』と言う世襲名を持ち、五代目『吉五郎』、六代目『助次郎』と続き、現在の戸主で七代目になります。

また城田家は、『さかや』と言う屋号を持っていますが、いつごろまで営まれていたの

かは不明です。しかし、慶元寺の過去帳に『二代離想念覚信士・弘化三年(1846)五月十九日、吉五郎事平助、本村酒や平助事』とあることから、二代平助の時、つまり江戸時代後期には本業である農業の外に、農間余業として酒屋を商っていたと思われます。

一方、旧城田家住宅主屋の建築年代については、記録・棟札・墨書等の手掛かりになる史料が発見されなかったため、正確な年代を決定することは出来ません。しかし、城田家の言い伝えに現戸主から4～5代前に建てられたとあることや、主屋復元調査により、当主屋が当初から店造り形式で建てられていたことが明らかになりました。

〔裏面へつづく〕

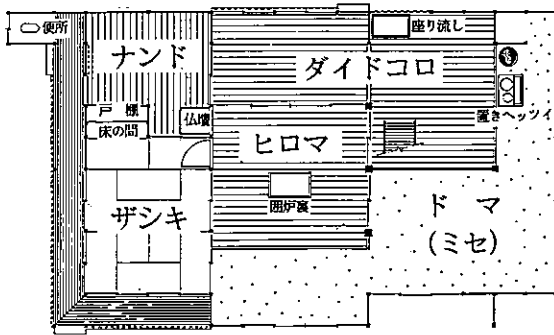


図1 旧城田家住宅主屋・平面図

左：1階平面図

39坪 (128.9㎡)

右：2階平面図

9坪 (29.7㎡)

以上のことから当家の建築年代を推定すると、城田家が半農半商の酒屋として最も繁栄していたと思われる二代平助の時、つまり二代平助が没した弘化三年（1846）以前に建てられたと思われます。

それでは次に、建物の特徴を見ていくことにしましょう。



写真2 「ドマ(ミセ)」より「ヒロマ」「ダイドコロ」を見る

建物の主な特徴

当主屋の間取りは、『ドマ(ミセ)』の外、『ザシキ』『ナンド』『ヒロマ』『ダイドコロ』の四室から構成された喰い違い四ツ間取りと呼ばれる形式を持ちますが、これとは別に一般の農家にはない造りが見られます。

『ザシキ』『ナンド』は日常生活の場として、また、『ヒロマ』『ダイドコロ』『ドマ(ミセ)』の部分は、日常生活の外に商いの場としても使われていたようです。特に、『ダイドコロ』の部分は元来、土間であったところに板床を張り出して店棚とし、いわゆる店造りの形式【写真2】が取られていました。『ヒロマ』部分の天井を高く取って広い空間を持たせているのも、ここを店と

して使っていたと考えられる理由の一つです。

土間境には3本の太い柱が並んでいます。これらの柱は、構造体としての役割を果たすと共に、家の格式を示す役割もしています。また、これら3本の柱が並んで立つ姿は、店の装飾としての役割もあったのでしよう。

東妻側の軒下は、^{さがいづく}船柁造りによって軒を出しており、町場に見られる店の構えを示しています。

この外、『ドマ(ミセ)』上部には^{ずしにかい}厨子二階（中二階）が設けられていますが、これは町家に多く見られる形式です。この東側（店の常口側）には、明かり採りとして障子戸が入り、その外側には^{こまがえ}駒返し^{なてごう}の縦格子が付けられています。

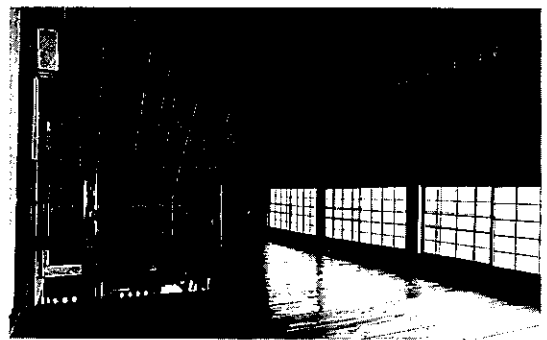


写真3 厨子二階（中二階）

この^{ずしにかい}厨子二階（中二階）は、多摩川を下って来た^{いかにし}筏師たちが休息したであろうとの推定で復元されています【写真3】。

このように、旧城田家住宅主屋は店としての造りが多く残されているのです。

区文化財資料調査員 高橋 誠

* 喰い違い四ツ間取りの形式は、江戸期の民家に一般的であった広間型から整形四ツ間型の形式へと移る過渡期的間取りです。